

## Q&A 地域アカデミア 2026Web 講座「豊臣大研究」

受講生からの質問に対しては、事務局で取りまとめた上、受講生のみがアクセスできる本 HP「資料室」上で共有できるようにします。  
今回の講義内で受講生から以下の質問が寄せられましたので、講師の先生からのご回答を掲載いたします。なお、内容は随時更新されます。

(2026. 03. 27)

Q1 :

羽柴本宗家の後継者は秀長と秀次であったが、鶴松誕生により後継者から外されたというお話であったかと思いますが、天正 16 年 4 月の聚楽第行幸時に金吾様（秀吉の養子であった正妻ねねの兄である木下家定の五男秀俊）に秀長や秀次といった一門衆に対しても忠誠を誓う起請文を提出させていることはどう見たらよいのでしょうか。

A1 :

ご質問たしかに拝受いたしました。  
このあたりの事情をかなりくわしくご存じと拝察いたしました。  
ただ、起請文の宛所になっていることから関係性を読み解くことは慎重にすべきではと個人的には考えております。  
たとえば、秀次事件直後に諸大名が起請文を出していますが、その宛所は奉行衆になっています。前田利家でさえもです。  
成案はまだ得ておらず、申しわけありませんが、ケースバイケースで慎重に考えなければならないと考えております。  
起請文は本来、宛所を書かず、それを焼いて、灰にして酒や水に混ぜて飲み、神仏に誓うものでありましたので、そのあたりも関係しているのかもしれない。

Q2 :

大河ドラマの影響で豊臣秀長の本が沢山出版されていますが、河内先生が目される多武峰の遷座やならかしはほとんど描かれておりません。私自身、先生の講義を聞くまでは秀長の病は大織冠を強制的に遷座させたタタリと思っておりましたが、古文書等の分析からそうではないというお話興味深く聞かせていただきました。ところで、多武峰の遷座について触れている書物として天野忠幸先生の「大和大納言豊臣秀長」があります。この中で天野先生は秀長は多武峰の老衆と若衆の対立を自律性を尊重して事態の收拾を図ろうとした。

ところが事態は急転する。横浜良慶は郡山近辺への移転を命じ、移転する僧侶には6000石の領地を保障するが、拒否した僧侶には一切領地を渡さないという強硬姿勢を示したとの認識はタタリではないが、秀長が強制的に遷座させたともとれますが、河内先生はどのようにお考えされますでしょうか。それから京都大徳寺大光院の秀長墓の写真がスライドにあり、先生の方から手前の大きな五輪塔が秀長の墓であると説明がありました。小さな五輪塔は誰の墓なのかお伺いしたいです。長府毛利家で編纂された「毛利家乗」に「冬十一月廿九日夫人豊臣氏京師に薨す、大和大納言秀長卿の女、豊公の養女なり、時に廿二歳、京都大徳寺内大光院に葬る」とあり秀長の次女の大善院かと思われませんが、大光院が特別公開されたので訪問し案内の方に問いを投げかけましたが、回答を得ることができませんでした。

A2 :

ご質問、たしかに拝受いたしました。

最初のところにつきましては、多武峰の移転をうながしたもので、大織冠の遷座が遅れることとは分けて考えることもできるかなと思っております。

また、後半部につきましては、わたくしもたずねてみましたが、お答えはありませんでした。しかも、墓石だけではなかなか誰の墓かもわかりませんので、むずかしいところですね。わたくしもお答えできず、申しわけありません。

いずれにいたしましても2回にわたりご参加いただき、ありがとうございました。